阿古義物語

九

122
11
42

藏書印

阿古義物語後輯

四

122
11
42

東京圖書館

和書門	小說類	一六函	五三架	一六號	一一冊

TOKIO LIBRARY
東京帝国図書館
明治五年創立
MOMBUSHO

明治十年購求

浦嶋敷回 河古義物語後篇巻之四

江戸 式亭三馬 遺意

第七齣 悪瘡詰備醫

天の与せる禍ハ仏法さらべ〜自ら為る禍いのがるべからずと宜るるゆ白波雲平ハ妻冲津が執念蝦蟇よ還着するものゝ為ら蝦蟇瘡いと痛しく。夜ゆ三度日に三度頻りに苦痛し七後ゆハ疵口幾ヶもあれて。恰も蝦蟇の面の如く眼を怒ら〜口を開き紅の舌を出し氣を吐くゆどするあと。蝦蟇にすと〜もうりうとなる〜其痛き強き時に虫螻をあさめまゝば疵口ゆまゝを喰ゆ支更よ蝦蟇の形粧に一毫ながらぞ又或時ハ蝦蟇瘡人の如く物いゆ冲津よ彷彿として。怒りの毒をふりて。如何雲平汝妾と皆老の繋りを結びうがら愛

壽ガ為ニ香に迷ひ加之ず耶麗姫がすゝめにまろせ情ゆゑ妾を殺せ〜其眼こゝの川の世よりハ報のべき汝劫く行矣の部下を従へ活斗歡樂を極め王侯の家貴といへとも及び難く為に此にまろせばといへ事あく沼池肉林の奢をなすことゝ子ども天數既に尽とれば三歳をまさで忠臣孝子のわゝ命を失へべしと罵りさけび支あり又ハ吾大切の珠を奪ひ飯さぐれより妾ハ婦ひるゝ〜長恨宿の野狐とうりそそこる口惜しき恥辱受くゝ墓を立るくを畜生に堕ちまじと妾ハ恥人のわゝ命を失へとゝ子ども尚魂魄ハ此土よとゞまり恥人阿漕一族の影身に付添ひ汝ハ此をむくゆるうりとゝハ正〜く小女郎狐ゲ亡魂乎或ハ怒るとあるハ弱〜三毒をすゞさぐ吾くが怨羅の亡執をとゝらすべしと罵るにぞ。さすが強氣の雲平も恐ろ〜

奈何ゝもして這悪瘡を治さんと又例の神医安田道全といへる者を招きて商議するに安田暫頭をうなけて考ひるゞ。猶ありて雲平に向ひいへらく這病を治せんにハ嚮に告せ〜已の年月日時柳ひ〜女子の生行と別に一種の奇剤を調ゝ。ゝ用ゆるうり外に絶て治方なり〜是蛇の蜈蚣をのむの理りにて速に治せんと疑ひうゝとゝ。其外に治方ある支を見ずゝ。さハいへ医ハ意ゆうりと妾に一ッの工夫あり。さハ奈何ゝといへに荘子にハ具母の人面瘡を治せ〜あとを求ゝ〜又或書に唐士趙の国に文仲子といへる名医あり。時に鷹声虫とゝの病をなゝらへる者あり這病ハ口に物をいへハ腹中にて声あゝ同じ支をいへ病ゆうりあゝ冤めて難治の症ゆうり當時文仲子本州を尋ねて諸の薬名を其病人に誦せ〜むるゝ藍と雷丸とゝ

なまじを誦する事三度におよべど。腹中に答ることなし。あれによろしく頻に藍と雷丸の二味を服さするに忽地治せしとあり這説荒唐として信じ難しといへども又よりどころなきにしもあらず。さればいまあるみな種々の薬種を取りよせて是を蝦蟇瘡の口におしあてがひ倘口をつぐみて受ざる物は是究めて渠が嫌ふもの也。これを服させば治せざる事あるべからず。是則天然自然の道理なりといふに。雲平大に歓び宴に侍る當世の耆婆偏鵲なりと頻りにほめて早速本草にのせてあるとあらゆる草根木皮はいふもさらなり。許多の薬をとりよせて一ッゝ是を瘡口におしあてゝこゝろむるに。悉く舌おしして是を喰ふに。道全も呆れはてゝ霎時詞もなかりける。當時蝦蟇瘡は両眼を活と見開き道全を屹と睨へ愚や庸医

奸智をたくましうして雲平に諂ひ祠をかざりて悪魔を鎮さんとする下心は金銀を多くむさぼらんが為なり夫凡医は仁術なり。されバ故人も宰相とならずんば良医となれといへり國の宰相となりて廣く民百姓に仁政をほどこす事がならずば良医となりて人の病苦を救へと宰相の仁政をほどこすにひとしけれバなり故に重き職なれバ人是を尊敬するを汝は常に黄白に富る人とみるときは治せざる病ひをも治するといひなし高金の薬をとらしめ或は先日のごとく人膽人油なども用ひん事を欲して科なき人の命をうしなひ又は薬の代にとて妻を售子を鬻ぎ家を破り賤を失ふ。これ皆汝がなす所。それ非道をすれども飽たらずして這賊究に来り凶悪比類なき雲平におもねり諂ひ既に善人床世を屠らんとせしは是皆

罪已が身に飯するゆり今又吾よ諸の業種を喰ハしめて悪瘡と治せんとするハ何の理ぞや貝母の人面瘡を治する藍と雷丸の鷹爪虫を愈すべきひハ是天然自然と發〳〵る病なれば這雲平が蛾蟇瘡ハあらず妾が一念蛾蟇と選著するのゆゑ多年の積悪一時に報ひ来りて彩る悪瘡を生めるなと自ら悔ひゆり。

さハいへ是吾のこゝがゆゑなるよりあらず妾が一念よ蝦蟇の執着且ハ小女郎狐の怨恨三方四方のうらみの念汝がよるみの霊よ注込障化をなさんとするゆゑのゆゑ或時ハ妾が姿のよるも聞え又ハ小女郎狐が魂ひゆゑ甚外汝が私に命をうゝハ〳〵絆多の人く汝が運命尽るにおよんで萬種の禍をなすなり何ぞ思道仲景ごとき名医再来して来るとも這病を治せん事思ひもよらぬと

冷笑のあぞ道全雲平も更よ言ふる事あるべきず其侭ふして打捨お紀ぬ彩りしハ頼も綱も切ぬとて〳〵いくばハせん〳〵昼夜業ど煩ひけるが不図思ひけるハ吾ものゝ妖術を授りし玉芝仙人ハ現よ今天竺よありと聞バ彼人ハ神通無量ふして仙の欲ふ所一箇とあてゝるハぞといの事ゆ。倘爰よあるバ吾奇疾も癒ぬべし。何卒道人愚まを憐ミぬべく遥の天竺ゆ這土よ飛来りぬひて。吾這悪瘡をいやしぬハ〳〵ゆ一人を筑西の方を再保して所けるに不思議や一陣の魔風とともに白雲庭前よくだるとひとく。あり〳〵耶魔姫の姿忽然とあらはれいで珍〳〵も室平四郎吾傳〳〵幻彩をわどこして近國の強盗をあつめ千有余騎の魁首と成めらく支是全く吾賜ゆりあるふ汝が悪行日〳〵増長〳〵て

雲平
異類
怪物

天誅の時既に迫きこあり。さまざま吾と汝と一旦師箕の契約をすゝ〳〵とまがあて遠く這玉こ来り。其奇瘡を治〳〵子へんと思ふ。さハいへ汝ハ生性猛慾深く。ゆゑもすまじ女色に耽溺して大淺をあやまる此後とも猛慾をたくしまもる此が身ハ又天命の越〳〵あるを所〳〵て擅ふれ猛の主が身ハ少も知て。己が身を焼こ異ゑ〳〵べ。よく〳〵謹〳〵むべ〳〵といふて雲平ハ指ぶ支限りなく。何ぞ偖師の教へ〳〵ありとべき這後ハ堅く慾情をたく〳〵やべ〳〵て天こ向ひて拳ひを立けまば。耶魔姫ハさらば迚何やらん口こ呪文を唱へ〳〵て指を相をむすび指くあ〳〵て猛扇を以て。彼腐れ〳〵まま〳〵蛾蟲瘡を三遭撫けまバアラ不思義や風雲を散〳〵ずが如く。跡なく消へうせけるあど。雲平ハ今ハ此たゞあぬ玉

芝道人の神通の徳を感じ驚音して。しらく。何卒道人少刻ゞ間吾岩嵐ことゞまりあひて。尚も妖術の温爽をかゝ〳〵ハまるゝ〳〵耶魔姫ハ首をふ揺ふく嚮ふもいるどく。汝ハ其器せまく。あて日本を魔界とゝ思ひもよらず。されば術の奥妙為難〳〵只此の幻術を顕ハ〳〵て愚民を迷ま〳〵合浪をむさぼるまて。一箇の歓楽を極むべ〳〵まさへ分限こ満ぜざる哀をうるまば。彼妖術を捨てゞ〳〵まこ剃髪をへゞ〳〵ゞ剃髪を亡まもいるゞ〳〵吾ハ老早く原の天空の石室こ飯り無ゐを楽〳〵まんあと是素望むあり。相見ん哀まあまこ限りあることといふと思へば又忽地四方〳〵白雲盛ひ重ると見るく耶魔姫が姿をひきはくんで西天へゞ飛去りける雲平ハ跡ふ〳〵やゞ〳〵ゞ指ゞ支斜ゞ〳〵ゞ早速まこ五郎重綱ゞゞめ頑八少を聚ひて奇

疾の軽く愈てる縁を語つて玉芝道人の神通不可思議なる始末を説て漫々道人の仙術をしてあるゝ部下の小賊ホも其奇妙くしるを感じける去る程に雲平ハ玉芝道人が神通にて奇疾軽く愈てるを悦び其當座ハ道人が教を守り婬情をとゞめけゝ。りしに又好るの心増長して原のおとく美貌女とさく所ゞ人の妻娘の嬚ひなく豪奪して頻りに婬慾をかりひまくこまけまで尚飽ぎやありけん不図仙の裏に思ふよう吾今新く千有余歳の盗賊の首領となりて金銀財宝ハいのもさらなり文君簫史衣通小町がおとき美人といへども平人の妻娘ならんにハ吾物も異ならじ。とまでとなれば入まんとて帝の前にまかりまゐ出ざるハ内裏女膳なり我往年都に横行せしころ数く見く何平彼内裏女膳を吾物として楽を極めば生涯の望既に足れり思ひ

ぞ今ハ新く何支も自由の身となりしゝゆゑ空しく幼に思ふのみにて年を経ぬ。

物と思へど大内ハ八百萬神の守護しゝのゝ吾妖術をもてどもを支へ

いざ奈何ともして本望を遂げんものと左さる右さる思ひめぐらしける。

怎生這雲平ハ術ハ蜘蛛仙人の妖術なれば月の内三日の日一日

のゝ術を行ひ給へ斯く其月日の日ともなりしゝ殊更に勇を

謹ゝ一室にまゐりて前程往時の事ども思ひ出ぶけ居るなりしゝ。

濱辺に出ゝ置てる物見の小賊慌しく走り来りて告て曰ふ遥の

沖に一艘の船に日月の旗をひるがへして其勢百騎ばかりと見へく。

あるに向て来る拍子官軍の討手ならん外に便く船も

見へさぶらず最いとふ海難く思ひいそど先這面に進ゆくこと。
聞く雲平ハ完尓と笑ひ答へ官軍何萬騎でも来るとも打ち
果らん況く百騎や二百騎の小勢にて寄せ来るとハ虎の髭を撫んと
するにひとし〳〵何程の支やあらん面白ふ捻てやれうといつて小賊ハ委
細兼諾したまうで去るとぬ彼小嘍囉い尚も漕ぐの櫓に登りて
うぐひ居るふ船ハいとゝあらひ近くなるまに一個の武士艫端に
あらハ出て櫓をやりけて箭文を射かける物ゝの小賊ハあまを
見て早速に彼の矢文を開て雲平ゞ前にうち来りて事の由を告げに
雲平も一向解ゞて思ひ合ゞら彼の矢文を開さ見るに當今主御
門院の宣旨あく武家に世を せゞあらるく支の口惜しとゝ力ゝ
やよがねバ啻ひるゝ〳〵手段ゝ生命の日を送るまと既ゝ久〳〵

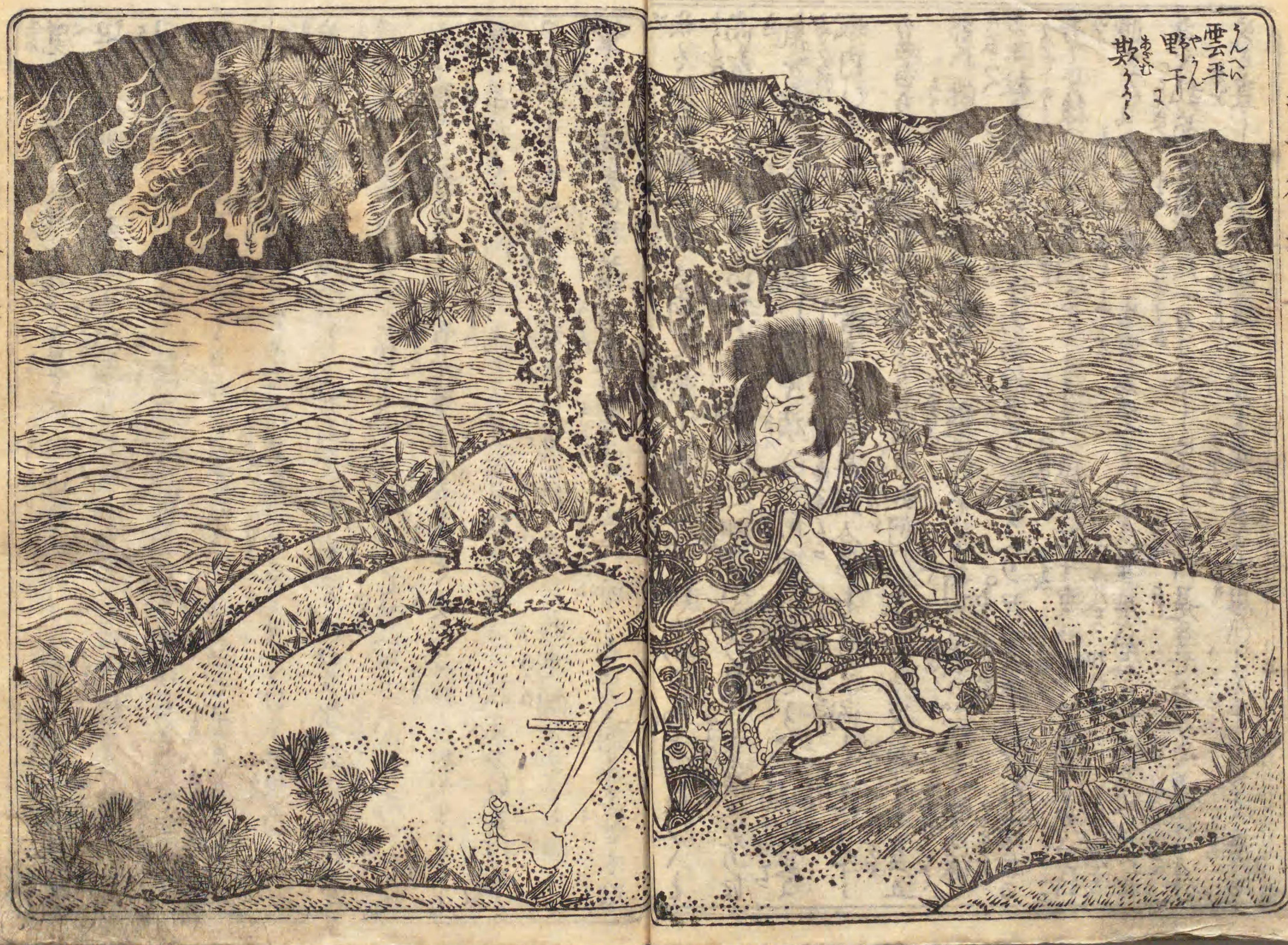
ふうるに此ゝ千騎ゞ嵐ゝ〳〵まとあり岩嵐大王と字する賊主とそ
寔ハ室平四郎重廣とゝの緒由ある武士なるゝ〳〵ゞ倘ゝをあら
ためて官軍ゝ対ゝ〳〵ゞ時をうぶして淀倉ゝ軍を亡ゞ〳〵原の如く。
公家一流の天下ゝ成ゞ天忠今までの充悪をあゞのゝ是ゝ
當時美人の聞え高き乱菊の前といゝ宮女を重廣ゞ寵の妻に
下〳〵賜ゝ〳〵きゝ且又重廣郷ゝ老狐の媚珠といふる類ひまゝ
名玉を持るとのゝ遠く大内へ聞えあまをまさげゝ私ゝ関白
の位をゝ〳〵ゝ天下の政支を主ゞらせんとの倫言持参せ〳〵禁
庭ゝの勅使ゝとの文体ゝに雲平ハ大きゝよろこび早速ゝ五
郎ゝ命じて勅使を招じけまバ勅使唐橋中納言綾重郷其外北
面の諸武士陸ゝあゞり岩嵐に入りゝ先権に下絵ゝ任ゞ進ゝ

軍兵宿駐を下し、のべて綸命あり、同く天へも登る心地して。あり難き事なり。けりとぞ。綾重丸は彼の媚珠を請取うくらん事を宣ふ。雲平いくらく。這は勅使を脅すと仰せ。玉も乱菊の前を引くるらでは献ぜ難しと。いかに勅使も左と思ひ、けん。彼らば即刻都に帰り吉日を選んで乱菊の前婚姻の義をとり結ばべし。其間に重廣は這外川浦に一城を築き鎌倉勢を防ぐべき役を為べしとありけるに、重廣は委細諾して勅使其外の者を数岩崎の襃に宴め。種々賞待して都へ帰りぬ。勅使重廣は急ぎ紀下の山賊に命を伝へ。外川浦の要害の地に一城を築かせける。日ならずして成就なりけるに。雲平はまた名ある画工をして模に画せ。彩清ら尽して花現目を驚ろかしたりけるあで部下の者共

今迄のごとく不審ありて。都人に変りなべしとて。烏帽子を脱ぎ袖を掩ばれ名もそ見つくる百官名にあらんかの。嶮に烏帽子大紋を着せ言語麁合まで悉くあらんかと。さ程とする所日までもなくいる支は夢にぞ知らざる木絶の輩。いでや正しき進止なんや。彼の木侯にして冠せ。楚人のごとく又は猿猴に内襃を立て天慶の昔に似たり。さるバ道に会ふ人ありしかども毒箭の辞づくひを与れく暫時がかど聰めくらして。涛落たる人数に。耳あく左右へ見ひろめあり或は烏帽子を後前に倒して。嗚呼ぐまく登城するあれバ殿中に先へ立て行人の長袴の裳をふまえて。諸共に立ちあり去る程に日を経て都より乱菊の前を送りおこれ。いらば重廣は紀を附し。則ち彼の年来秘蔵し。媚珠を勅使へ渡しければ。

勅使ハ鎌倉へ入り給ひぬ。重廣ハ日頃の望み足りて、乱菊の前と
昼夜枕席を共にして玉の道、ゆきゝを忘れ、今ハ妖術も用
るに足らずと大ひに傲漫の心ありとぞ。曽我酒匂に耽り、酒池肉林の奢ハ
ものゝ人朝夕乱菊と共に楽しみを極め、更に鎌倉勢をふせぐべき
用意もなかりける。ある或日彼濱辺の物見関章ふと眺めて走り
来りて告るハ今既に程なく霧深く立て、沖中更に見へざるとゝ
霧おさまりてそこ〳〵洋中を見るに、忽地数百艘の兵船あらハるゝ。
さまゝの旗下風に翻へり是鎌倉の手ぶり、早く
防戦の用意あるべしとゆ。何も未終らざるに、貝鉦太鼓乱調ふ
ならし城の表門まぢかくよせると見あるに重廣ハ大きに驚き
立んとするに、ゆゝの宿酒まだ醒ず、浪〳〵として一歩ハ高く一

歩ハひく。漸く鎧を引て着、太刀を佩、維ある馬をひけくと。
高聳よりとびくるとゆゝ。誰あり問て参ふ。重廣ハ
氣をあせり五郎重綱ハ何ぞや。須八ハ何国へ行とゝ呼ぶ更に
城内ひそまりかへて音もなし。早鎌倉の手ぶり落うせ
ものゝ有けるハ雲平ハ歯ぐきを。如何ハせんと考る折しも実五
郎ハ深手数ヶ所を負ひて。骸さへそる箭ハ義のごとく。朱に染て
力を杖に突さゝへて。よろめき立入り。兄重廣に申ひ。落倉の
手ぶり後の山の後門よりも此城を十重廿重に寄せ来れば。
遯れんとすれ〳〵。疾く生害あるべしとゆゝ重廣ハ無念の涙を注ぎ
乱菊の前を只一刀に刺殺し、今ハ是までなりと刀を逆手に
直し左手の股後へぐさと突立るよと思ひしが、めく夢の


うんへい
雲平
やうん
野干
きつむ
欺くく

覚るおとく四下を見まわすに今迫吾城郭と見へしは河川流の淵辺なる磯馴松の木蔭に茫然として座しゐる這猿を吾姿をうつ見まわすに髪おどろにみだれ薄尾花のごとく猿らなる衣裳は裂ちぢれ玉にけがれたる見るもかなしいかばかりさまなるわぞ呆れ惑のあまり大方あるべきぞ。ふたたび瞳を定めて借見まわすに今吾ふたりけしを思ひ乱れ菊の前と見しも鳥おどし紫山子おくめりにありかの調度も金銀珠玉をちりばめたるとおのれしかるとさハ為て苦むして或ハ端の欠損なる瘡疤の類ひまして皆是塵塚より持ち来つる物とかがしきなり。益く足れたるそく何の所為なるぞ支をまたまたちまちぞ詮方なきまわ立上つて足ふまもなく当に岩嵐の方に行くに五郎重綱を主とめ須八の輩十余個多の松蔭那裏の岩間に吟行助しゐるに何ぞも皆衣服

もけがれ顔も泥にまみれて猿猿きあと限りとなり雲平ハ是を見て愈慌ぶき呼覚すに重綱須八ハ漸くの夏おく人如つ起く胡慮と足あしを見まわし雲平が姿を見且吾輩の行粧をうつ見く駭くあと大うさあるべぞ。ひとと呆れて詞なく当時雲平人くに向ひいりけるハ始め官使来りて吾に官儀をさげ年来秘置し媚珠をたてまつるべ乱菊の前をのべきよりの勅命なく這外川浦へ柵をきびき年月の栄耀も今更なるべ皆是玉をもつて老狐が神通に惑ひ迷ふ吾も又頗る神通を弱ふ為のおのくと野子のわた詐られ

あとに不審けまと皆く思案せしが猶あり横をとて拍吾常に行ふ所の幻術ハ蝦蟇仙人の術をわどとし難。倩思へば初め官使の来りしハ已の日なり老狐なれを知て吾をこそ

なせしものなるべし。きらんゆへ此年月許多の月日をるなせしと思ひしも。
究めて四五箇日をるべからず。彼屋生は栗の飯の生米ざること〳〵五十歳の
栄へを夢うつしに引うつく重廣ゆの武士が畜生のたゆにあざひろ
きく年来秘蔵せし珠を奪とられしことを返もぐるも易らねと牙
を噛く怒ることいとも詮方なく尚も彼呼這ふて倒れ伏ゐる小賊ふ
をとびさすに其勢百騎あはすべき残る数百の小賊ふは海へ沒ら
まけん又何所へ往さやくひ人且うんぐ新く雲平は重綱頼は和く供ふ
吾岩嵐へいかうんるふ。さしも結構なる岩屋は獣の足蹟ふ
穢れ紙門障子の類ひは喰ひ裂ふと見へく。見るも鬱悒光景なる
あゞ是も又彼の老狐ゆ所為なるべし口惜しきるいかゞもあ〳〵ねど。
今更に詮方なく残兵をあつめく尚多ふ徒ぬ。

第八齣

鉗金鈎美人一却説實副の四郎吉香は薗葉共侶仲睦じく暮し居るふ吉香不図
風の心地とあ卧せしゆ次第に病重くるふ日くの業の代り久の煙りふ如
何いせんと蘭多ふ心をいとめ何卒主の病本服するよふと長谷の観
世音へ訴誓をとりけ日毎に歩みをことびける妻ふ又雲平ゆ主五郎重
綱は比ゆ鎌倉ふ帰り退糧の姿ふ寡〳〵編笠を深く〳〵遠近を徘
徊して金銀を貯録る家の曉蹊を窺ひかゆ忍びあみく豪奪をること
数をきしず。さるべ何の活業もなく有徳ふ暮ら〳〵けるゆ或日長谷の
観音へ参詣せしふ頃しも弥生の半ふして鎌倉山の八重九重咲もて
ろしず散もそゆゆ風景雅言ふ言めのく重綱は殆く奥ふいりそこふ
妻ふとあるゆ稍く石坂を登り舞臺ふ近ふ妻ふ進を歩ひらべ

茶を煎じ来る治の人を待老婆あり。あの老婆が店に一箇の遠目鏡を
もけるを見て人を借りて茶をきろとそそんとす。重綱て彼
老婆が店の発に尾らけく一碗の渋茶をんうけく四方の風景を眺め
ばく不図遠目鏡を見付く這いと真なる業なりと近くよりて遠
目鏡を覗くに鶴が岡の八幡宮の廻廊より雪の下辺ら多治群集の
老男女七里が潰綱にする漁師が行粧まで見えるおそくうんあるもの。
重綱は若く真に入り目すもあるに見わたるに忽地向ふの方より歩行来る
一箇の若き女あり年齢は廿あまりと見えて貧しき家の妻とおぼしく。
縦くにする針目衣を只一重着て髪もいろいろあげしう油気もなく乱れ
最物おもいげなる面色なくあるさまにて歩くまで天然の美質
紅粉翠黛の色を所なあらずあるやあらる西施浣る虞氏美蓉の面を員

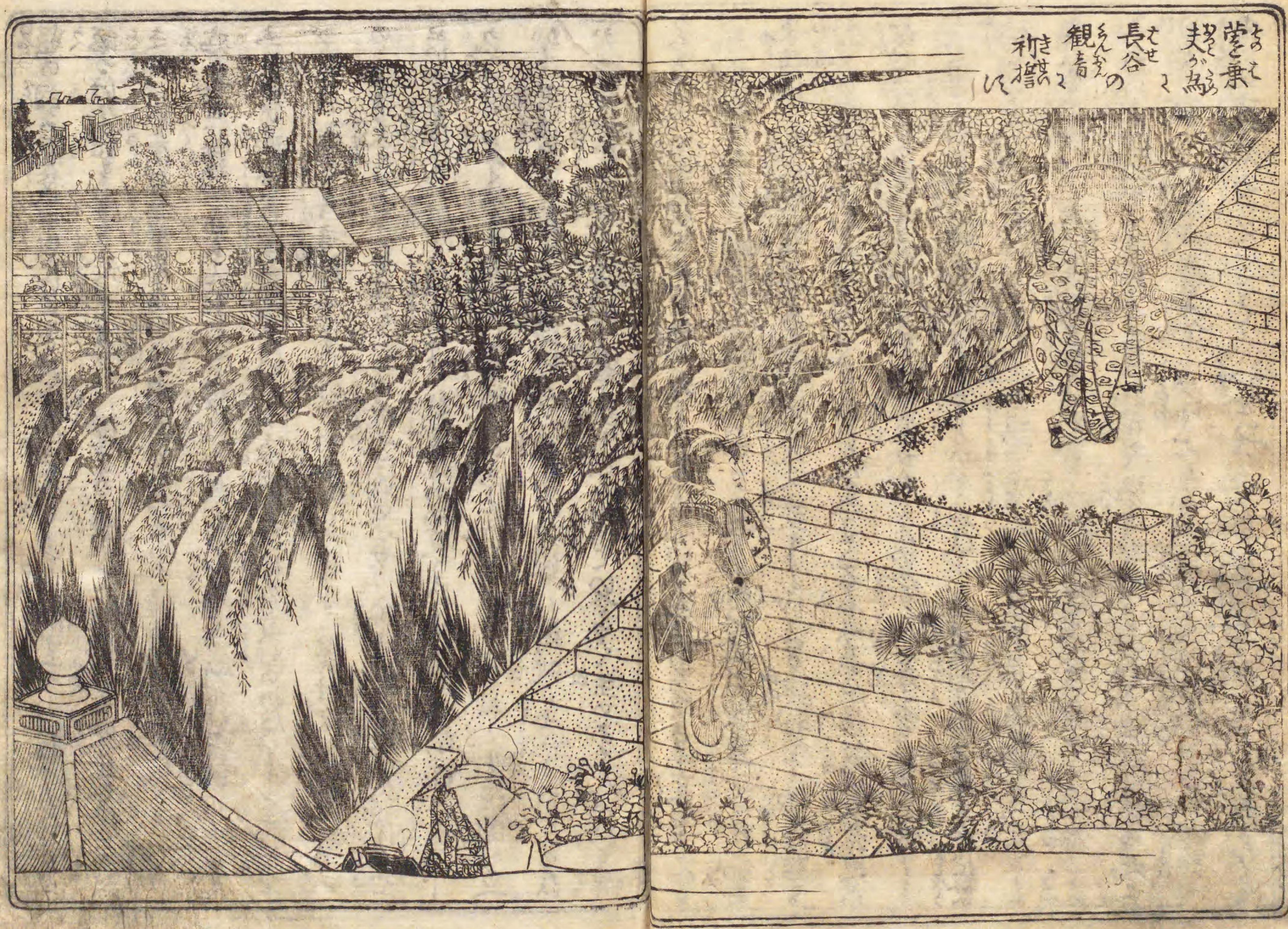
なるに異なるべし。従来色好きの人なる五郎重綱忽地あるを高くして是こそ
鎌倉に咲乱れたる八重の重の桜も物ならん今日の花見は這ものの花
ぶりをさそうにあるもの何ぞの人ぞ何ぞの行らん問いまかりしと。
いふを聞く茶亭の老婆は扇を振て遠目鏡のて見るべし近く四人ばかり
まで参らば遠へぶりしる所をるる人を問んと其所までいでらんわ。
人は何所へ去ぬべしとて冷笑居るる重綱
も實なりと既に所路を促さんとする彩柄忽地石坂を登り来る者あり。
五郎は這人を見るに豈討らんや今遠目鏡にて眷恋せし美人なり
けるに重綱いとあぐる斜なるべし近付くまでにうく見るに目鏡
てんとるるに迫まるるして其美艶麗変いとうつくしく這女を何者ぞ
いふに是別人にあらず吉香が妻の蘭葉なりと蘭葉はあるて石坂を登り観

世音の霊前に額づきて暫時ありて問答ありて茶屋の老婆に最期の様を
授けて又静かに石坂を下りて飯盛の重綱が後影の見えなくまで見送り茫
然として居たりけるが嘆と吐息つきて
あり。まだ吾倫が今目撃したる美人といへば彼女なり。怎も渠に
何所か奈何なる人の妻なるや。縁故を詳に語つて呉れよ。這は余りに
狂激なれば。今日の其値に受けたる此の朱提を与へたるのみ。
紙ひねりとなりて老婆は忽ち満面に笑を含み斑なる歯をあらはし
て呵々と笑ひ相公何と思へばなれども斯く多くの
朱提を恵まるるや宜しく今の婦女は老婆が同郷にして実副
何ぐ所の退糧の妻なるが頃日其夫病に罹りて死れば其の
病気全快を祈らんとて日毎に這観音へ詣でるなり。と聞く重綱は再

老婆に向ひ徐倉卒に問ふ奈何なる因果ぞや今の女を視て
苦しき煩悩の夫迷へども去らぬ老婆は吾が氷人となりてのたまへば
生涯その恵みを忘るまじと聴く老婆は眉を顰めて曰く易に変ずる
あるべきにあらずと。妻なるものは世の常の金心浅膚の婦女なりとも亀の甲より
年の功とやらん老婆が富楼那の弁を以て説きすすめて法もあまねく渠は従
来夫あり倘とまだあらざる時んば老婆も共に乗ずべき欲加之ず彼の
人は貞操平々く仇しき妻なれば敢て無理に強ふる道理にしてもなく大夏を引出さんもあるべからず這は只思ひとど
まりのひねりとのみ詞の表向裏屋住居の身貧なる夫婦黄金ぞ多く
いざ〜ならば徐ろに見えざりなん地獄の沙汰も金次第とやらん。
其代つまは徐なるべ老婆は一簾の骨折代をのらんやら慈悲の手業

なき歯をあらはし。呵々と笑へば。重綱も苦微笑。そはいのまうでさんべるべし。
這者ぶふうるひうば吾斯緑ひてるぶ。ごけの黄金を尽して。老婆をねぎらひ
まぶりてん志のおうぶんわどうこうらひて見てのはまう〜。切の頼み聞くその旨ハ
うろまこく返りけり抑這茶屋の老婆ハ諢名い熊鷹老婆とよばまて最
うくうう。強深き性なまば道ならぬとまりうぶ。重綱ぶ頼みを若諾て平生に者
耗をることもなき紀吉香ぶ許さまば。わ〜も菌茸ハ藤を剪〜居こう
ぶが縁くえうらぬ鷹鷹ぶまり〜いとを疾くいねがを
思ひこで物をもいとず居こうこ〜うば鷹鷹ハをきかなけまで従来うくる
ふ面皮の老婆ぶまば。ぶれを得ともせず菌茸ぶ力自ら日頃う〜坊ひたり
なくい思へども兎ぶ角に活業のいとぶ〜。迫隣ぶハ居ぶまば。
耳ぶして今日までいおとまりうぶ〜てこびねと言うけく上がまちに屈

うこうるふぶ菌茸ぶハまを歓ばねどいねともいまぶ。いりでさる夏のまんべる
べき其所ハ余りに端近〜。あるうえあぶりのうこ。いひつく煙草吸ふて生を
朱羅宮の長煙管。長きまを夫の病氣ぶ塗もまぶこる痩世界ぶ胸の膝も
あまあい。ひく人の煙ることまもにるもぶ〜。あらハまうこる負家の体鷹鷹老婆ハ
ぶうをひとめ実ぶ真女とゆらん賢女ぶからんハうぶ物の本をう見こぶ〜
うど唐遠き唐土ぶ其ぶ昔の支とのこ思ひ〜ふ因の前ぶあう菌茸ぶ仕家
仇のおとぶ真女ぶあらぶ夫の永の病の看病とひ日毎ぶ観世音へ願をを
あびの〜信ひとひ其精力のみをも金仇うりのへべきこまで時節ぶ
らねば全仇ハかりのハば。さられ神やぶ。ぶもりでうあまを金ぶうんのべき
日ぶ〜ぶ〜て金仇ぶるのべ〜必ずぶ。ぶうと思ひく世ぶ頼ひのべ誰ぶ
者病する者あらんやよく〜ぶをつひく泉を大切ぶ持のへこ平生ぶうりて


なを
螢乘
翠の鳥
せて
長谷
の
観音
を
祈誓
して

艱の詞ゝ薗葉不審けれど只よく程ふるまして疾く歩まづ いねがてに思ひ
飯るけ〳〵なく徐くめぐりて後より座して喰へば山も空〳〵とやらん彭
夫婦〳〵と何の活業もなく安閑として居るいば終日飢ゑ乏し人の
疱瘡を患ひ痛とゆらんゆらざる世活を繰あぐらとて所謂老婆ん楽ひ
ちも老の癖必ず悪み関のひそか吾倹平生に徐の真心のいたつ〳〵さを何と
ゲみとハかるべし吾倹とてす貪〳〵泉の如何ともせんすべなく心わびしの
のこなり今日ちらずも此の福を関のごせり徐あまを諾めべ否
とりつゝ薗葉ハ嘆く獲ゑなる繰鷹ゐの支よりまとにハあらじと思ひ
くどすぐのもいまとに亦赤何ものとハ有すべらねど先徒関せ
かゝ其後兎も角もと癒けまバ繰鷹老婆ハ繰既に七八分ハそのひ
たすらに中に矣を舎けく愈ゑ給ひてゆらく主のある人ゑ彭る繰

とりゆゑ道ならねど近くハ彼の常盤前とやらん貞操を捨て情
にたとゞひ〳〵由ゑにあそ彭く繰家前の常盤前の勲功
あり誰ゑ常盤前をさして貞女かゝ手ずとゆゑるべしとこれとハ
遠くゞも或稀有の人徐を垣間見頻りにあくれ千くの黄金にえても
僻妄にうゝまりくとゆゑ人ゑ。情思ゞ世ハ親まの為ハ浮川行の
流まに沉く夜毎〳〵ゑ旧を送り新を迎るとゝろのき勤をなすも最多
うゝまハ武家性も強〳〵らね武家ゑまバ耶〳〵らゞ若ゑまを兼
引くゝのいらバ獨り徐ゞ身の幸のこなゝず老婆ゞ身の幸ゝり疾くを
決〳〵のゝと従ふまとく薗葉ハ且呆まと且腰立く吉香ゑ関人ゑバ却て
病の故障とゝならんと頻ゑ彼関扇以く士倫の下をうちあをぐ音に
まゞら〳〵病人ゑ必希ゞとの びゞひを悟らね繰鷹繰返〳〵

耳りとはなく。いとゝ〳〵ほゝくと腹ぐてしと蔭をあハとろの鹿すせば。黙然と
きて居こりしが數度説きあまさこく漸くにいりけハ吉香ハ〳〵すも妾
いあ夫ハ手紙萬般の苦労を去のひ妾もまこと吉香ハ〳〵ゆくあハ種この艱
難を經く斯く貧〳〵くとも夫婦共供ハ暮らすを樂〳〵みふ互に愛
苦をうこりあひてそををせめくのひわりとするハ譬へ藩安楽モハ物ハ。
源氏の君ろ業平のおとき好男子又黄金銀を多く貯へのの人ハもせよ。
いとぞろ小夜の衣を重へきさろ正のれ支ハ再び言出のハろること最ことら立
きげろる面ろふく。せとゝ〳〵くあのぐ士倫ふ胸のかむらと共侶ふ弗ろり
たる蓋潟蓋ハ〳〵ぞもそをぞこと。明ていろ見ぬその中案ふ根遠の紙
寿老婆。胸の工の粗語ハ面ふくらゝつく吾倩ハ吾倩と思ひく飢死
きんがいとふ猫をあこんとする猫の祢の紙を遠餐ハ〳〵鬼の

守らせのの西条なろぐ〳〵最笑止ろる支ろりゝを嘲く咄くはの死立
既るぬ吉香ハ鶏鷄が来ろ〳〵始ろり寐入ろる面ふあく居こりしが菌
葉が貞ふを感敷〳〵歩咳ハ。蔭ハまが因さあこりと見こけふハ茉
を茶瓶こうろ〳〵ふ病床へのて来りまろひ生ハ最前煎じあがり
ろうど。餘ろ支ハ枝寝入ろるひたふハ起〳〵まねらせんふ〳〵ろ
きふく。扨ろ支ハ。ふ熱も却く呑ゆくけふ先ろろ
みわ一口飲ぐ見ふといと信く安ハ。ふ顔を吉香ハ熟〳〵ふ詠め誰有ん
頼宗ハの閑ふく人も知ろ安達藤九郎盛長ハ〳〵の出ろる鳴戸橋
内どのく妹ともいふ〳〵身のようるハ這勇に撃がれて這年月の艱難
辛苦夫を懐ともかのふ〳〵ずして貧〳〵きなろふハ程ろりの看病の遺ハ
口ふハいとぐこ〳〵最前ひろらざる。鶏鳴老婆が来り〳〵ろ這女り

るあはれをちいのと故音と深入うとしてうつ波ば業を遠ち
きて仏をすゝめく僻妾に其といのよ偖あを従来夏縁平き仏とも
やとハ思ども富貴ハ他人集り貧賤ハ妻子離散と誘もあるを
その鷹を聞ばやと尚もねのりしかをのちあく聞くもぢあて仏が滅ん
感ぜるもあまりあり見るうげもなく這身をさいどに思ひそ入れる志
吾妻なるら妻とハ思ハず其実い嬉しけまで花咲まともなく埋木
況や這遺の這病なりくあを生べうとも思ハず最前鷙鷹がのん
志を聞ば富有の人手くの黄金にうくく仏を妾ませんとのよろあれ頼ハ
てもなくまり今ハもまを吾倍ものを早くを変して彼の差寝が
りのまわくなりのひく赤の栄花をたりのと云て涙雨のおとし
薗葉ハまを聞もあず。まぶり落る涙を左右の袖ふ絞ちらしあハ
吉甲斐なく聞えのあるみよりや金殿玉楼よりて弱夕弦招
美味く飫綾羅錦繡よまりくまを樂とのべ絞やのるる山林
波濤ふく鯨吞る磯虚空を壁近ふ裳をゝげて肩ようくる貧苦ハ
苦ハるらじ斯くま婦睦まずく暮すこを樂しくもいべけ是
のまを宜のとも四身を捨まるらをて。のでる異まこまみんや妾が一念
あても日ならぬ快まくまんますべきよ必ぞくあまらの支をんとせば。
まやく金使あのよの仏をうくくと持のとのまる詞ふ吉香もいとぐ。
其誠を感じける

流轉数回阿古義物語後篇巻之四終

122
11
42

宋書

第一